

## 平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 採択教育プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称 : 国際交流と地域連携を結合した人文学教育（海港都市を教育フィールドとして）  
 機関名 : 神戸大学  
 主たる研究科・専攻等 : 文化科学研究科 社会文化専攻  
 取組実施担当者名 : 大津留 厚  
 キーワード : 日本史、東洋史、西洋史、社会学、人文地理学

## 1. 研究科・専攻の概要・目的

人文学は、人類のたどった歴史の中で、古典として蓄積された知的体系あるいは行動様式を解明し、理想の人間像を実現するための倫理や社会規範のあり方を追求する学問分野の総体である。文化科学研究科は人文学の各学域の高次の専門性と総合性をいっそう発展させ、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代的な課題に対応しうる人材養成のための教育研究システムを構築してきた。特に本教育プログラムを推進した社会文化専攻は、人間社会をフィールドとする動的分析を主とするもので、知識システム論講座、社会文化論講座、比較社会文化史講座の3講座から構成されている。所属教員は41名で学生定員は10名である。

文化科学研究科社会文化専攻は、古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析能力を育成し、新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる人材を養成することを目的にしている。その中で、知識システム論講座は、言語を主とする知的活動や、行動・知性を背後で支える感情・感性を、伝統的人文学の範囲を超えた科学的視点から理解し、新たな人間観の形成に寄与する人材を養成することを目的にしている。社会文化論講座は、フィールドワークをとおして、現代社会の動態を調査分析でき、社会構造と文化形象との相互関連という視点から、地域の固有文化・造形文化の変遷、文化遺産をめぐる諸問題を、国際的視野のもとに解明し、社会文化の形成に寄与できる人材を養成することを目的にしている。比較社会文化史講座は、地域社会を歴史学的なフィールドとして、人間行動のダイナミズムを実証的分析手法によって深く理解し、歴史文化の形成に対応できる人材を養成することを目的にしている。

## 2. 教育プログラムの概要と特色

本教育プログラムでは、文化科学研究科社会文化専攻を主たる担い手とし、文学研究科文化動態専攻と協力して、海港都市研究センターおよび地域連携センターの事業と

連携して、実践的な大学院教育プログラムを進めることを内容としている。それによって、人文学の現代的な課題を国際性、地域性の両面から発見し、その知見を国際的な場で発信し、地域社会に還元できる新しいタイプの人文学の研究者、大学教員を養成することをねらいとしている。そのために、2年間で、文化科学研究科社会文化専攻と文学研究科文化動態専攻におけるコースワーク型の研究者養成の体系的なモデルを設定し、新たな指導体制とカリキュラムを編成した。（図1「地域に根ざし国際的課題に応える人文学研究者の養成」参照）

## 3. 教育プログラムの実施状況と成果

(1) -1 教育プログラムの実施状況と成果（平成17年度）

- ①17年9月に、プログラムを実行するための両センターおよび両専攻の講座委員等からなる、合同指導委員会を設置した。
- ②修士課程に地域連携センターを中核としたカリキュラム「地域歴史遺産保全活用論」「地域歴史遺産保全活用演習」を設定し、修士課程共通科目として開講した。これにより、地域住民と接し、地域社会の歴史的形成過程を実践的に学ぶことで、研究者としての基礎となる社会への深い認識を養うことが出来るプログラムを試行した。
- ③海港都市研究センターが主催する大学院生および若手研究者の研究交流プログラムを文化科学研究科のカリキュラムの一環として位置づけ、試行的にこれを行った。合同指導委員会が主催する準備会（修士課程大学院生も参加）を3度開催し、博士課程大学院生が予備報告を繰り返し、報告内容を高めた上で、17年11月、韓国木浦大学校での中国中山大学、韓国木浦大学等、台湾大学との国際シンポジウムにおいて、博士課程大学院生11名が発表し、その原稿を合同指導委員会の指導でブラッシュアップし、『海港都市研究』（創刊号）に論文として掲載するという、体系的実践的な研究者育成のためのコースワークを開発した。
- ④18年2月に、中国中山大学、台湾大学、木浦大学校、

韓国海洋大学校から大学院生、若手研究者4名を招聘した。ここでは、修士および博士課程の大学院生が、日本での海港都市関係の資料収集の支援、研究交流のためのフォーラムを自主的に展開し、海港都市研究センター、地域連携センター、合同指導委員会がそれをサポートするという教育手法を開発した。

⑤優れた博士課程大学院生を研究員として4名を雇用し、本プログラムの具体的な立案と実施に携わらせることによって、研究者を組織する能力の育成を図った。

⑥文化科学研究科院生の共同研究のための教室を、大型の液晶モニターを設置するなどして整備した。

⑦イニシアティブ経費で海港都市関係図書、資料、地域研究関係図書、資料を整備した。

### (1) - 2 教育プログラムの実施状況と成果 (平成18年度)

①地域連携センターが提供する「地域歴史遺産保全活用論」「地域歴史遺産保全活用演習」については、その内容を整備し、修士課程のカリキュラムとして定着化をはかった。また博士課程大学院生は、活用演習では研究内容を市民に分かりやすく説明する、大学教員としてのインターンシップ的なカリキュラムを導入した。

さらに、地域連携と国際交流を直接結びつける試行的カリキュラムとして、第一次大戦時において青島で捕虜となったドイツ、オーストリア兵を収容した青野原俘虜収容所(現小野市・加西市)について、これを世界史および地域史、さらに文化論の観点から大学院生が地域住民の協力を得ながら分析した。その成果を当時の資料とともに、11月に大学で展示し、さらに収容所で行われた音楽会を復元しその歴史的な意味を問うという企画を行った。展示会には大学関係者だけでなく地域住民も含めて550名が見学に訪れた。音楽会は神戸大学交響楽団の協力を得て行われ、100名を超える参加者があった。展示会、音楽会の準備は地域連携センターの協力のもとで4月からすすめられ、研究資料を発掘し、解析し、学問的な成果を公表し、展示や演奏を通してその内容を社会へ還元するという一連のコースワーク開発の実践例となった。(写真1・2参照)

この展示会を中心となって担った岡本恵学術推進研究員は以下のように総括している。「私は以前より博物館や美術館の運営に興味を持っており、学部生の時には博物館実習も体験した。しかし実際に自分たちが展示会を開催する側に回ったのは、今回のことが初めてであった。展示会場や資材の制限、観客の視線を考慮に入れた上で写真パネルや展示品の配列を決めたり、展示品に添



写真1 展示会開会式



写真2 展示会場

えるキャプションを作ったりするのは、楽しくはあったが、経験不足から思うようにいかず歯痒い思いをすることもあった。小野市の方からお借りしてきた貴重な品物を自分の手で並べたときには、責任を感じて緊張もした」。(『事業報告書』p.33)

②海港都市研究センターが主催する大学院生および若手研究者の研究交流プログラムを文化科学研究科のカリキュラムの一環として位置づけ、試行的にこれを行った。大学院生が共同して研究を行うために整備された教室を利用して、合同指導委員会が主催する準備会(修士課程大学院生も参加)を3度開催した。博士課程大学院生はここで予備報告を繰り返し、報告内容を高めた上で、18年11月、台湾大学での中国中山大学、中国海洋大学、木浦大学校、韓国海洋大学校、台湾大学との国際シンポジウムで発表を行った。(写真3)ここで発表を行った博士課程大学院生9名は、その原稿を合同指導委員会の指導でブラッシュアップし、『海港都市研究』(第2号)に論文として掲載した。これは17年度に開発した体系的実践的な研究者育成のためのコースワークの実践であった。



写真3 台湾大学でのシンポジウム

③19年2月に、協力校である中国中山大学、台湾大学、木浦大学校、韓国海洋大学校から大学院生、若手研究者5名を招聘した。ここでは、修士および博士課程の大学院生が、日本での海港都市関係の資料収集の支援、研究交流のためのフォーラムを自主的に展開し、海港都市研究センター、地域連携センター、合同指導委員会がそれをサポートするという17年度に試行した教育手法を定着させた。(写真4)中国海洋大学の趙月超氏の資料収集をサポートした文学研究科社会動態専攻(修士課程)の大学院生・金菊花(中国からの留学生)は以下のように総括している。「私が資料収集の補助を担当した中国海洋大学の趙月超さんは、日本で借りたい資料を事前に知らせてくれました。そのリストに挙がっていた43冊の中で、彼の研究課題と関わりが少ないと思う資料と他大学の借りられない資料を除いた29冊の本を1週間で借り、コピーすることができました。かなりの数にのぼる資料なので、今回の日本での資料収集は趙さんにとってこれからも意義ある参考文献になると考えられます。(中略)今回のプログラムを通じていらっしゃいました学生と先生方の皆様の語学の才能に驚き、自分ももっと頑張りたいという意欲が出てきました。これからの勉強と留学生活に励みになります。そして、中国・韓国・台湾・日本の歴史が共に発展していくことに対しても認識を深めることができました。これらの国は、もっとお互いの学術的な意見交換と交流が必要だと強く感じられました。(中略)今回のプログラムは若手研究者にとってもとても役に立ったと思いますし、手伝った私のような学生にも勉強と交流のよい機会だったと思われれます」。(『事業報告書』p.59)



写真4 神戸大学での交流会

④17年度の試行につづき、18年には、研究科内公募によって、優れた博士課程大学院生9名を研究員として雇用し、①から③の本プログラムの具体的な立案と実施に携わらせることによって、研究者を組織する能力の育成を図った。

添田仁学術推進研究員は以下のように研究員としての活動を総括している。「神戸・横浜・長崎など日本の代表的な「海港都市」に関わる歴史資料(近世・近代)の所在情報を収集する作業を担当しながら、運営組織である世話役会への参加・記録、各種シンポジウム・研究交流会・資料情報交換会の準備など事務作業にも携わった。また同年(平成17年)12月からは地域連携センター、海港都市研究センターのオーガナイザーとして、第5回地域連携協議会、生野古文書合宿(古文書講演)・灘チャレンジ企画など、連携センターの活動にも合わせて参加した。(中略)大学院生同士がそれぞれの専門分野を越えて、お互いの研究について議論できたことも意義深かった。海港センターが企画した国際学術シンポジウムや研究交流会には、史学・文学・哲学といった研究領域や、日・東・西といった研究対象地域の異を問わず、人文学を志す者が広く集まり、それぞれの視覚から意見を交換した。専門分野を離れて、他分野の研究者の前で研究発表する際には、論を明確に、かつわかりやすく説明する必要がある。それは自身の論の柱を確認する場ともなった。また、議論の場でなくても、リラックスしながら、お互いの研究環境、研究対象へのアプローチの仕方などについて熱く語り合うこともあった。留学生も交えて、民族の問題・差別の問題などデリケートな話題にまで展開したこともある。今後、現在のような専門分野で区切られた「たて割り」のゼミだけでなく、様々な専門分野の学生が一つの研究対象を共有する、いわゆる「よこ」のつながりで組織されたゼミを設定することも必要なのではないか」。(『事業報告書』pp.35-36)

⑤研究員を中核として他の大学院生を組織して、購入し

た図書、資料を整理し、広く一般の人が利用しやすい環境を整えた。具体的には、「地域中世史関係文献調査」、「大阪湾、兵庫県下中世港町に関わる文献、資料調査」「神戸大学附属図書館所蔵の神戸・東アジア・植民地関係図書解題」「『青島官報』解説」という成果となって表れた。『青島官報』の整理を担当した石井大輔学術推進研究員は以下のように総括している。「この『青島官報』がドイツ語で書かれたものであるため、西洋史の大学院生が中心となって日本語見出しの作成を行った。それぞれ自ら専門とする時代・場所を異にする者同士での共同作業ということで、手探りの部分が多くあったが、それだけ学ぶことも多かったと思う。特に日常の研究活動は専ら個人で行っていることを考えると、今回の共同作業は大変貴重で、新鮮な経験になったのではないかと思う」。(『事業報告書』p. 32)

(2) 社会への情報提供

青野原俘虜収容所展示会では大学院生が主体となって図録を作成し、見学者に配布した。また新聞社やテレビ局の取材に対応し、イニシアティブ事業が社会的に認知されるよう努めた。(写真5・6)



写真5 神戸新聞 2006年10月21日



写真6 NHKによるインタビュー収録

大学院生が整理した資料は海港都市研究センターのHPを通じて誰でもアクセスすることが可能になった。

イニシアティブが展開した授業である「地域歴史遺産活用演習」では、兵庫県朝来市生野町で大学院生が企画して古文書を活用した町づくりに協力するなど地域社会への貢献を行った。

4. 将来展望と課題

(1) 17年度、18年度の成果を活かした大学院の改組

平成19年度から、大学院文学研究科(修士課程)、及び大学院文化科学研究科(博士課程)の改組・統合により、博士前期課程、博士後期課程の区分制大学院である神戸大学大学院人文学研究科を新たに設置する。この研究科の以下の教育体系は、イニシアティブの成果を応用したものである。

- ①大学院生の指導について指導委員会制度の導入。
- ②修士課程でのセンター等を利用した人文学の現代的な位置を学ぶ共通科目の設置。
- ③博士課程でのセンター等を利用した研究組織能力形成、研究者としての自立支援のための共通科目の設置。
- ④履修年限内で博士論文を作成するための体系的な研究指導プログラムの設定。
- ⑤キャリアパスとして、博士論文提出者の海港都市研究センター、地域連携センター等の研究員として雇用。

(2) 将来展望

- ①地域連携事業の国際化

今回のイニシアティブ事業では、地域連携事業への大学院生の参加による企画運営能力の涵養に関しては、主として小野市との協力による青野原俘虜収容所展示会に集約される活動を行った。しかしこれは地域連携に留まるものではなく、そこに収容された捕虜兵たちが、オーストリアやドイツの出身であり、中国の青島（第一次世界大戦時ドイツの租借地）で日本軍に敗れて捕虜になったことを考えるとき、それは自ずと国際的な共同研究に連なるものでもある。具体的にはオーストリア・ウィーン市での青野原俘虜収容所展示会の開催に向けて大学院生の企画運営力を高めていくことが求められている。

## ②海港都市研究における国際交流事業の継続

今回のイニシアティブ事業で、中国の中山大學、台湾大學、韓国海洋大學校、木浦大學校との共同研究システム、資料収集作業を通じての大学院生間の交流事業が定着した。そこで得られた国際交流の方法を生かして今後も交流を継続する。

## ③社会への還元

イニシアティブで得られた海港都市に関する知見を社会に還元するため、引き続き『海港都市研究』を刊行するとともに、出版社の協力を得て、海港都市研究叢書を発刊する。

## ④授業

イニシアティブ教育プログラムで展開した海港都市研究センター、地域連携センターのカリキュラムは改組後の区分制大学院人文学研究科において研究科共通科目として必修化された。

### (3) 外部評価の実施と今後の課題

東京大学名誉教授、印刷博物館館長の樺山紘一氏に外部評価をお願いした。その結果以下の所見を頂いた。

外部評価委員・樺山紘一氏（東京大学名誉教授、印刷博物館館長）による所見

樺山紘一（東京大学名誉教授、印刷博物館館長）

1. 当教育プログラムは、神戸大学がおかれている現実の条件を適切に理解したうえで、「国際交流」と「地域連携」との密接な結合を課題として掲げ、十分な見通しをもって開設されたものと評価される。顕著な国際性をもつ兵庫県と都市神戸を念頭におき、また大震災からの復興の経験を継承する地域連携を希求したからである。そこから、グローバルな視野とローカルな視野とが結合した、説得力のあるプログラムが設定されたわけで、そ

の成果がきわめて高く期待された。

2、実際のプログラム展開にあつては、しかしかなりの困難にも逢着したように思われる。「交流」と「連携」には多様な可能性が存在するとはいえ、大学院教育にとっての適切な主題を選択し、良好な成果に到達するためには、賢明な戦略が要請されるからである。それなしには、たんなる文献的な調査や一般的な解説の羅列におちいらざるをえないであろう。こうした困難は、全般的には適正な方法で克服されたように判断される。

3、その第1は、国際交流を「海港都市プログラム」としてとりあげたことである。国内外の海港都市を素材とし、中国・韓国・台湾におけるケースとの共通性に着目して、連携事業を実施した。それらの都市における大学機関の院生や若手研究者との共同研究は、相互に大きな刺激をもたらした。国際シンポジウムとして開催された成果報告は、十分の吟味にこたえるものである。

4、第2には、地域の歴史遺産保全を主題として、市民にむけてその重要性を解きあかす作業を、教育プロセスに組み入れたことである。この作業はけっして容易ではないが、着実に成果はあがっている。ただし、こうした主題において、地域社会とのより密接な連携関係を実現するためには、さらに努力が必要であろう。

5、これらのうちで、ことに注目される試行的プログラムは、青野原俘虜収容所の調査・分析である。第一次世界大戦のドイツ・オーストリア軍兵士の俘虜収容所について、現地の小野市との連携にもとづき調査が進められたものであり、国際性と地域性との望ましいかたちで結合・実現する結果となった。そこでは、日本人学生ばかりか、多くの留学生が積極的に参加し、教員と院生とに顕著な自信と勇気をあたえた。大学教育におけるモデル事業のひとつとして、広く注目をうけることになるろう。

6、プログラム全体の運営にあたっては、ことなつた分野を統括するための合同指導委員会がよく機能しており、教育プログラムの展開が適正に図られた。なかでも、歴史学・社会学などの諸分野にわたる教員が、かなりの程度のエフォートをここに投入した結果、教育組織の活性化につながった。また、全在籍生の半数におよぶ大学院生がそれぞれの関心にもとづいてプログラムに参加した。その経験は、ただちに学位論文の作成に直結するわけではないが、若手研究者としてのキャリア形成に、有為な貢献をなしたことは確実である。国際性と地域性という両側面を体現することは、人文系学問にとって、ますます必須の素養となっているからである。

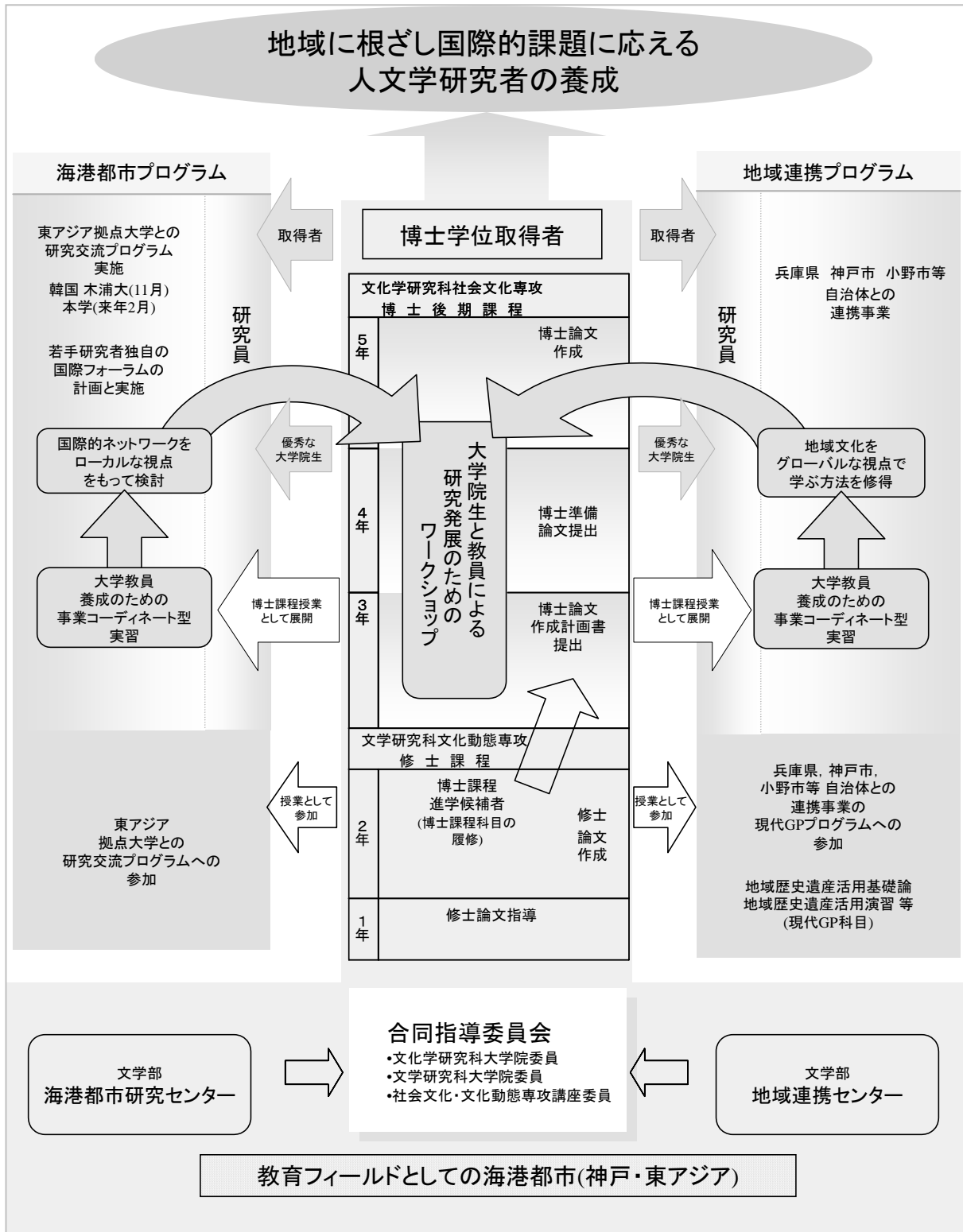
7、総体として評価するならば、本教育プログラムは、2年間という比較的短期のうちに十分の戦略性をもって

運営され、教員と院生の双方にとって、望ましい成果をもたらしたといえる。今後にあっては、青野原俘虜収容所のような、活力のある事例をさらに発掘しながら、長期にわたる教育システムを開発することが求められる。

以上

樺山氏の指摘にもあるように、「国際性と地域性という両側面を体現することは、人文系学問にとって、ますます必須の素養となっている」現状のなかで、今後ともこの「魅力ある大学院教育」イニシアティブで開発された地域性と国際性を合わせた大学院教育をさらに展開していきたい。そのためには、適切な事例を開発していくことが必要であることが指摘されている。今後の課題としたい。

図1 履修プロセス概念図（地域に根ざし国際的課題に答える人文学研究者の養成）



## 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ委員会における事後評価結果

<b>【総合評価】</b>
<input type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的は十分には達成されていない
〔実施（達成）状況に関するコメント〕 「国際交流と地域連携を結合した人文学教育」という教育プログラムの目的に沿って、計画が実施されており、教育課程の再編や海外の大学との交流などの面で一定の波及効果を有している。 社会への情報発信・提供については、新聞等のマスメディアへの情報提供をはじめ、ホームページ、展示会などを通じて広く行われている。 今後、海港都市研究センターと地域連携センターとの有機的な連携体制の充実を図り、よりグローバルな視点から、海港都市の問題性を高度な水準で研究教育するプログラムとなることが期待される。
（優れた点） ・ 海港都市研究センター及び地域連携センターという、既設の研究組織との連携を活用した教育プログラムであること、また教育課程の再編に着手する意欲が評価される。
（改善を要する点） ・ 「地域連携事業の国際化」と「海港都市研究の国際交流事業」の大学院教育への明確な位置付けと、組織的展開のための具体策の充実が望まれる。